九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『狭衣物語』の本文研究

閻，紹婕

https://hdl.handle.net/2324/4474904

出版情報：九州大学，2020，博士（文学），課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

（様式６－２）

氏　　名	閻　紹婕
論　文　名	『狭衣物語』の本文研究
論文調査委員	主　査　　九州大学　　教授　　辛島　正雄 副　査　　九州大学　　教授　　髙山　倫明 副　査　　九州大学　　准教授　　川平　敏文 副　査　　九州大学　　教授　　静永　健

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

本論文は、物語文学史において、異本の多さと本文異同のおびただしさで知られる『狭衣物語』について、そうした本文の揺れに着目することで、諸本の関係性や、本文異同の発生の原因などについて、具体的に解明しようとしたものである。

第一章では、『狭衣物語』巻一で、許渾の師の一説「蝉の黄葉に鳴いて漢宮秋なり」を狭衣が吟唱する場面を取り上げ、前田家本『枕草子』206段の表現と似ていることを指摘、この段が、『枕草子』の主要な伝本である三巻本と能因本に含まれないことから、その流布の状況への注意を喚起する。それとともに、『狭衣物語』諸本では、第二系統と第四系統で夏から秋への季節の推移が明記されるのが、第一系統が『枕草子』を踏まえた表現となっていることへの無理解から生じたものと推定し、第一系統の優位性を見る。

また、『狭衣物語』巻一において、諸本間に大きな異同のある箇所として、狭衣の唱える法文が、第一系統では、「即往兜率天上」「弥勒菩薩」であるのに対して、ほかの三系統では、「身色如金山、端厳甚微妙」とある場面を取り上げ、第二章では、その直前の表現が、『枕草子』の「春はあけぼの」と「鳥は」の段によるとする先行研究を検討し、第一系統のみ、「ほととぎす」の記述に『枕草子』の影響がなく、ほかの三系統と異なることを指摘する。第三章では、法文の違いは、弥勒信仰と阿弥陀信仰との違いを反映したものであり、いずれも『法華経』を読誦したものであるが、阿弥陀信仰へと時代的に傾斜したことが、もともと兜率天上に生まれ変わることを望んでいた狭衣の本意を理解できなくしたと理解し、ここでも第一系統の優位性を見る。

第四章では、『物語二百番歌合』の前半、所謂『源氏狭衣歌合」を通じて、藤原定家が所持していた『狭衣物語』の本文系統を検討し、第一系統とは異なることを確認することで、本文の揺れが平安後期すでに存在していたことを確認する。第五章では、『狭衣物語』における漢詩の受容が、『和漢朗詠集』所収の摘句を出るものでなく、和歌的な変容をともない、原詩の断章取義に留まることを述べる。

以上のように、本論文は、『狭衣物語』の本文異同のありようについて幾つかの新知見を提供することで、あらためて第一系統の重要性を説く一方、資料篇として系統分けの困難な九州大学中央図書館所蔵の細川文庫本『さころも』を翻刻・紹介することで、今後の研究にも備えようとしており、その成果が期待される。よって、本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに十分な能力を有することを認めるものである。